

「力ある方がこのわたしに」

ルカによる福音書 第1章 39節～56節

説教 岡村 恒 牧師

マグニフィカートと呼ばれる、マリアの讃歌。これはクリスマスの意味を明らかにしています。「主を大きく崇めます」と、響きます。

神様はこの時のマリアのように、約束の言葉を信じることができるように、具体的な“しるし”を与えられました。“しるし”がなく、言葉だけを握りしめて歩むことは困難です。弟子たちですら、主イエスが逮捕されると逃げ出し、主イエスとの関係を捨てたのです。

神様は与えてくださる。その奇跡の只中に、私たちはいます。ここで、礼拝をしていることが、具体的な体験であり、“しるし”なのです。

この讃美歌はマリアのオリジナルではありません。昔から詩編や預言書に記されてきたものです。マグニフィカートという言葉には、「大きくする」という意味があり、神様が、私たちの思いや期待を遥かに超えているというのです。

この時、マリアは急いで山里に向かい、エリサベトに会いに行きました。マリアは天使ガブリエルの来訪を受けて、自分が特別な仕方で神様の御計画に用いられると聞いたばかりでした。当初は全く受け入れられなかったマリアですが、「お言葉どおり、この身に成りますように。」（ルカによる福音書 1章38節）と、受け入れたのです。そして、エリサベトを訪ねて行ったのです。聖霊に助けられて特別な体験をし、神様への確信を与えられる体験を重ねて行きます。

神様は最も良いことを実現して下さるお方です。エリサベトは高齢であり、どう考えても子を宿すことなど無いはずでした。しかし、エリサベトが救い主の道を示す子を宿して六か月になっていました。マリアも救い主を宿しており、神様の奇跡を一緒に体験します。

神様は、神様から離れ去る民を、何度も呼び返して連れ戻すお方です。この神様のご計画をマリアは受け入れました。マリアは神様を讃美します。その言葉は神様に向かって捧げて来た讃美歌であり、祈りでした。神様のなさることを、その都度、受け入れて来たマリアの讃美は、実は、世界が明確に変わる奇跡を証していました。

これまでも、神様の救いの約束が実現するようにと祈り求めて来た信仰者たちがいました。しかし、マリアの讃歌は、自分の肉体の中、救い主、主イエス・キリストの命を抱きながら神

様に向かって捧げた讃美でした。世界が変わったことを知り、信じた者の讃美でした。クリスマスに、神様のひとり子がこの地上に来てくださいました。これは、人間業ではありません。聖書の約束通り、ベツレヘムにおいて実現した神の御業、奇跡でした。

今日は、アドヴェント・クランツの3本目のロウソクに火が灯っています。かつて来てくださった主イエスが、もう一度来てくださる再臨を待ち望む待降節を歩んでいます。主イエスは、長い時間をかけて、私たちを天に迎え入れる用意をしてくださっています。そして用意ができたなら、再び来て、私たちを迎えて下さると、聖書に約束されています。この神様のみわざ、奇跡を私たちは今か今かと待っています。

エリサベトのお腹の子はマリアの声を聞き、喜び踊りました。マリアは天使の告げたことが、神様の力であり、全能の神様の御業であることを身をもって味わい知りました。土の塵から人をお造りになることができる神様は、このように小さな人間を用いて、その壮大な救いの御計画を実現して下さるのです。

私たちはしばしば神様を小さくしてしまい、自分の願望が実現するように、神様を道具として用いてしまう罪を持っています。しかし、マリアは、神様の、計り知ることのできない愛の広さを知りました。自分自身が、無に等しい存在であることを知って、神様の大きさを知ります。初めて、神様を大きく誉め称えることができるようになりました。聖霊によって裏切りから伝道へと歩んだ弟子たちのように。

私たちも今、マリアと同じ場所に立っています。あなたの人生をもって、私の救いの計画を実現すると言ってくれる神様がおられます。神様が生きて働いていてくださるのです。神様のひとり子、主イエスが十字架にかかり、私のために死んでくださった。この奇跡のしるしを目にし、歩んで行く群れが、ここにあります。

マリアがエリサベトを訪ねに行く道と、帰りの道とでは、全く違う姿をしていました。神様のみわざを味わいながら帰って来たのです。同じように、私たちの人生全体を、神様は祝福して下さり、マリアのように、神様を讃美して歩む道を進ませて下さいます。

（記 説教要約奉仕者）